

# チェルノブイリ

私の出会った原発運転員たち

七沢潔

出会い

1993. 4. 26



チェルノブイリ事故犠牲者7回忌  
(モスクワ・ミティノ墓地)

この日「英雄」として讃えられた消防士と異なり、原発運転員の墓には「翳り」があった・・・





アレクサンドル・アキーモフ  
(享年33歳)

АЛЕКСАНДР АКИМОВ  
06.05.1953 - 11.05.1986  
ФЕДОТОВИЧ



シフト長としての責任感から  
事故後、原子炉中央ホールで給水活動  
1986年5月10日 モスクワ第6病院にて死亡

アキモフの父親

息子たち運転員について  
ひどいことを書かれてきました



レオニード・トクトゥーノフ  
(享年24歳)



原子炉の出力調整の担当  
事故後、給水活動で被曝し  
5月14日 第6病院で死亡

トプナーの父親



私は 見知らぬ人に  
唾を吐きかけられたんですよ



「おまえのバカ息子が 原発を  
爆発させたんだ」とね



事故原因は当初

「運転員の  
規則違反と  
操作ミス」

とされた

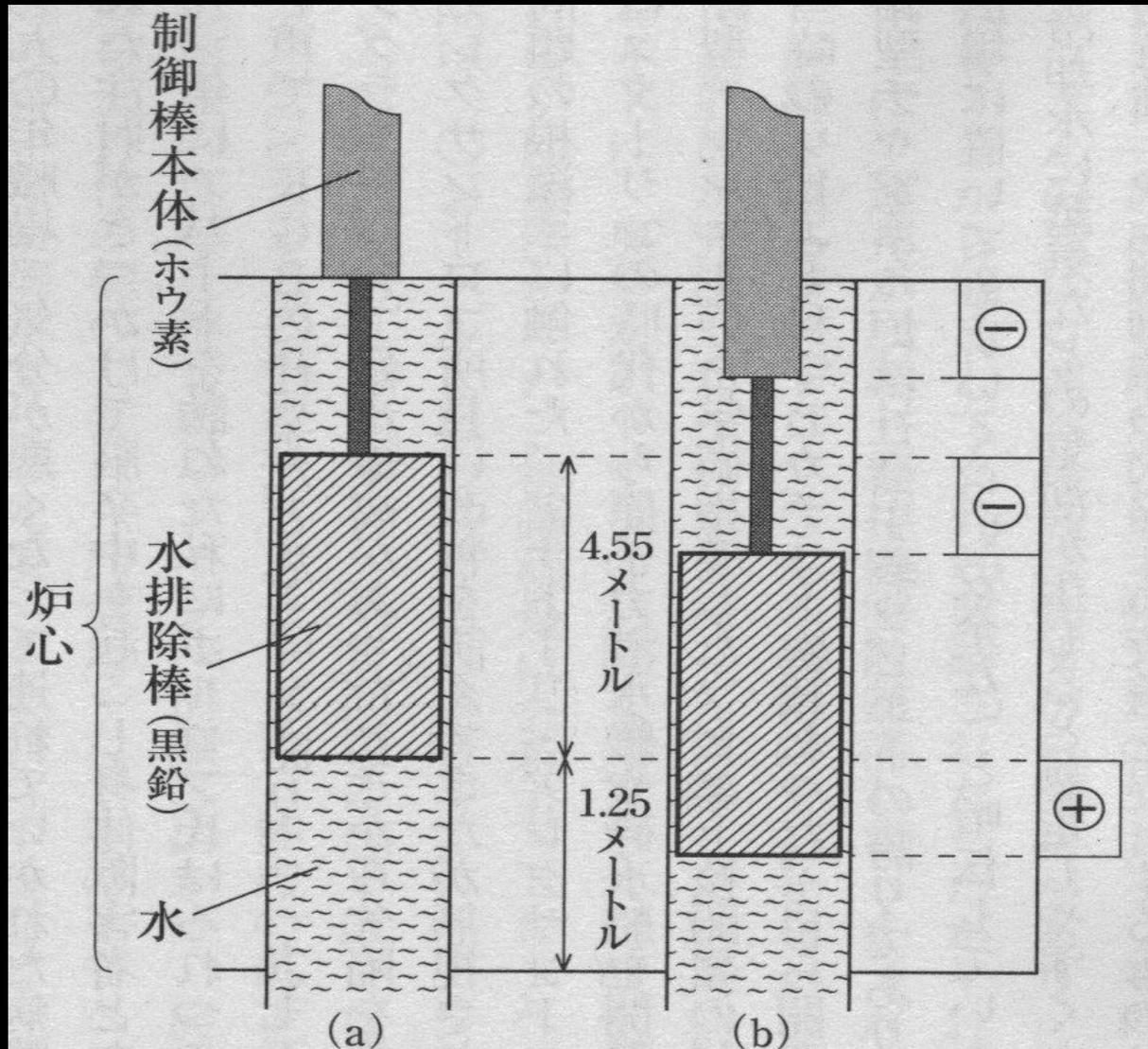
ソ連政府は事故から4カ月後  
世界に報告し、画期的な「情報公開」  
と賞讃された





だが真の原因は  
「**原子炉の設計ミス**」  
だった

# 一斉に投入すると出力上昇する 制御棒の構造的欠陥



An aerial, top-down view of a nuclear reactor core. The core is a large, circular structure with a complex internal layout of fuel elements and support structures. The image is in grayscale, with some highlights from overhead lighting. Overlaid on the image is Japanese text in white and pink. The text explains a physical shortcoming of the reactor: at low power levels, bubbles can form in the cooling water, which increases the reactivity.

そして  
低出力域で  
冷却水に気泡ができると  
反応度が高まる

原子炉の物理的欠陥  
だった

運転員はその欠陥を  
正確に知らされてなかった



1991年 事故再評価委員会が報告書を出したが、ソ連邦崩壊の中で注目されなかった



「事故は運転員の責任ではない」

「ソ連政府は事故直後から  
真実を知りながら虚偽の報告をした」

私は未だ名誉が回復されない  
運転員たちを訪ねることにした

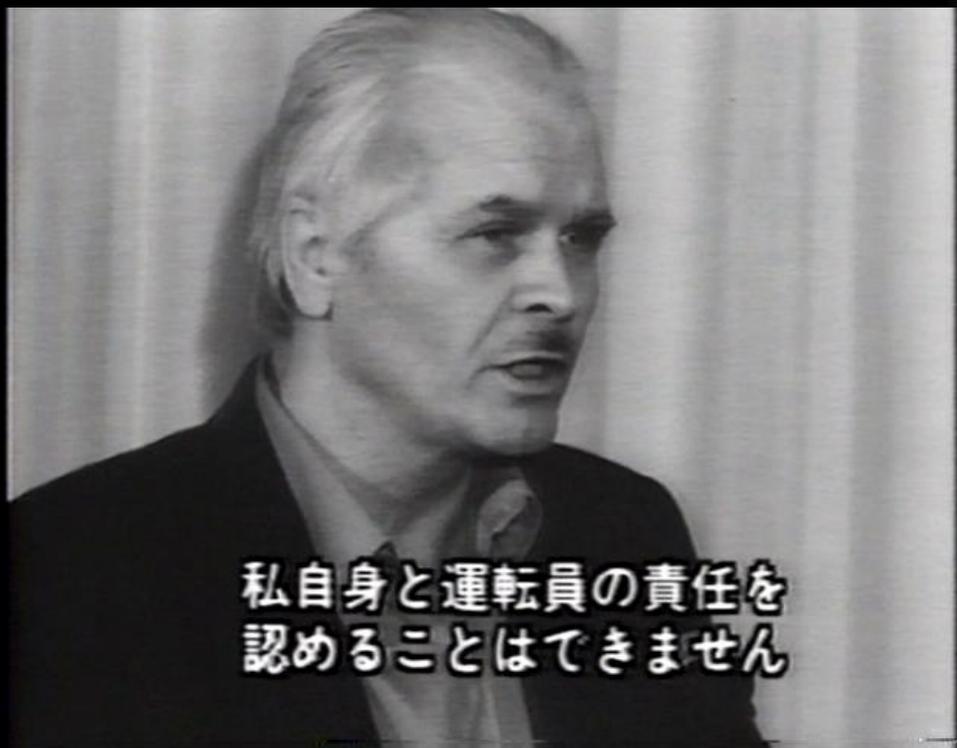


# 1. アナトーリ・ジャトロフ

(事故当時、副技師長)



1987年7月  
ソ連最高裁特別法廷



6人の幹部は有罪、  
ジャトロフは  
禁固10年の刑に



1993年春、キエフの団地に住む  
ジャトロフを訪ねた。(当時62歳)



事故後負った $\beta$ 火傷は、3年間の  
強制労働収容所暮らしで悪化していた。



彼らは ソ連側の発表を  
故意に信じたのです

90年 ジャトロフはIAEAの事務局長に  
ソ連の虚偽報告を見逃したことに抗議する  
手紙を書いた



「アキーモフやトプーノフの遺族の  
ためにも、運転員の名譽を回復したい」

# 2006年夏、私は再びジャトロフ家を訪ねた





ジャトロフは95年、白血病で死亡していた  
推定被曝線量は公称5.5Svだった



妻イザベラ「夫の死後、本を出版し、当局に  
名誉回復を訴えたがダメだった」



長女のオリガもチェルノブイリ原発の職員だった。  
1年間事故処理作業に従事して被曝。



オリガは父の勤務先の原潜工場のある極東で育ち、工科大学で金属学を専攻。カザフのトラクター工場勤務をへて26歳でチェルノブイリへ。



結婚して子供もできたが、事故後に離婚。  
尊敬する父が、事故の責任者となり職場で  
失墜する様を見るのが何より辛かった。  
事故当時4歳だった娘の出産が気懸りだという。

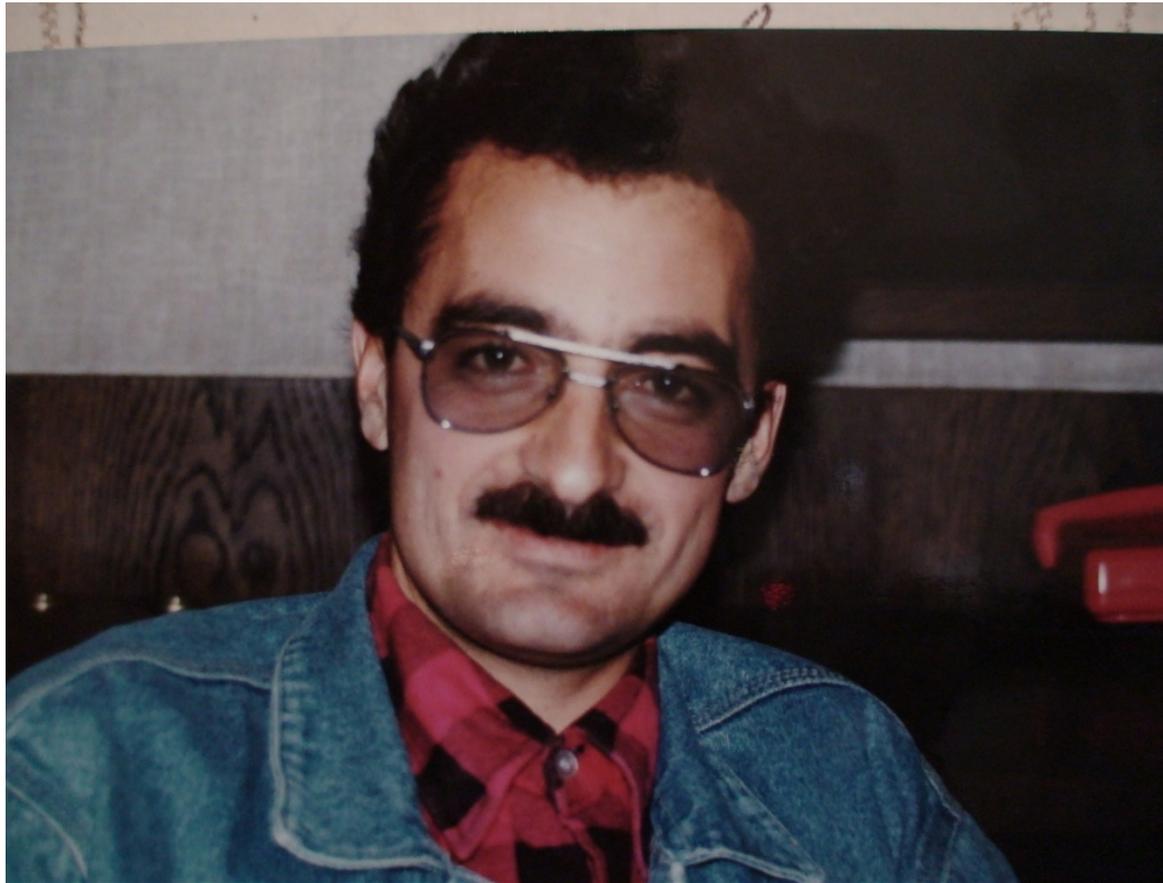


## 2. ボリス・ストリャルチュウク (冷却水、循環ポンプの主任)



1984年

当時26歳



1993年  
35歳

「ひどい夢を見ているようだった。停止スイッチが回って1、2秒後に1度目の衝撃音、嫌な予感で部屋から逃げ出そうとしていると、2度目の大爆発が起こった」



1.5Svの被曝。「午前5時プリピャチ病院に行くが満員で入れず、アパートへ帰って窓を開けたま寝る。夕方、起きて交代シフトで原発へ行こうと思った。原子炉が破壊されたという意味がわかってなかった。KGBの人が家に来た。翌27日飛行機でモスクワへ、第6病院に入院した。」



2006年  
48歳  
キエフ在住

事故後は白血球が一時減少したが回復。  
いまはウクライナ原子力規制委員会で働くが、  
放射線管理区域には入らない。



「20年たって事故を思い出すこともなくなった。  
以前は事故さえなければ、シフト長になれた、とか  
よく考えたが、いまはあまり自慢もせず、文句も  
言わない、ほどほどの人生でよい、と思っている」

### 3. ビクトル・スマーギン (交代シフト長として原子炉復旧作業に従事)



モスクワ在住

1993年  
2006年に会う

2回とも取材交  
渉は難航した



4月26日早朝、交代シフト長として4号炉に入り、  
原子炉への給水作業をして被曝。公称2.5SV  
その後、腎臓と胃に腫瘍ができ、摘出手術。  
運転員では唯一人「レーニン勲章」を授与された。



「私も娘も  
ロシアの原子力産  
業で働いている。  
あまりオープンに話  
すことはできない」

「『運転員の責任』という公式声明は見直されてい  
ない。原子力省にも、クルチャトフ研究所にも黒鉛  
型チャンネル炉の設計者たちがまだいるからだ。  
本当のことを言えばボルコフのように捨てられる。」



## 4. イーゴリ・キルシンバウム

(タービン主任)

事故当時28歳



被曝線量  
公称0.45Sv

1993年  
彼の証言は  
想像力を刺激した

「夜、暗くなるととても美しく見えました。原子炉から蒸気が上がり、それに原子炉の中から出てくる光が当たって、**この世のものとは思えないほどきれいなんです**。プリピャチの病院に入院した職員たちは、みな口をあけて窓から眺めていたんです」

その後  
キルシンバウム  
のゆくえが  
わからなくなった

そして  
意外なところにいることが  
わかった

2008年9月  
イスラエル・ハイファ



キルシンバウムは1994年、妻と二人の子どもを連れ、  
イスラエル北部の町に移住していた。



イーゴリ

妻・アーラ

長男・ダン



長女のアンナはプリピャチ生まれ。チェルノブイリ  
事故時は2歳。この時は24歳の大学生。



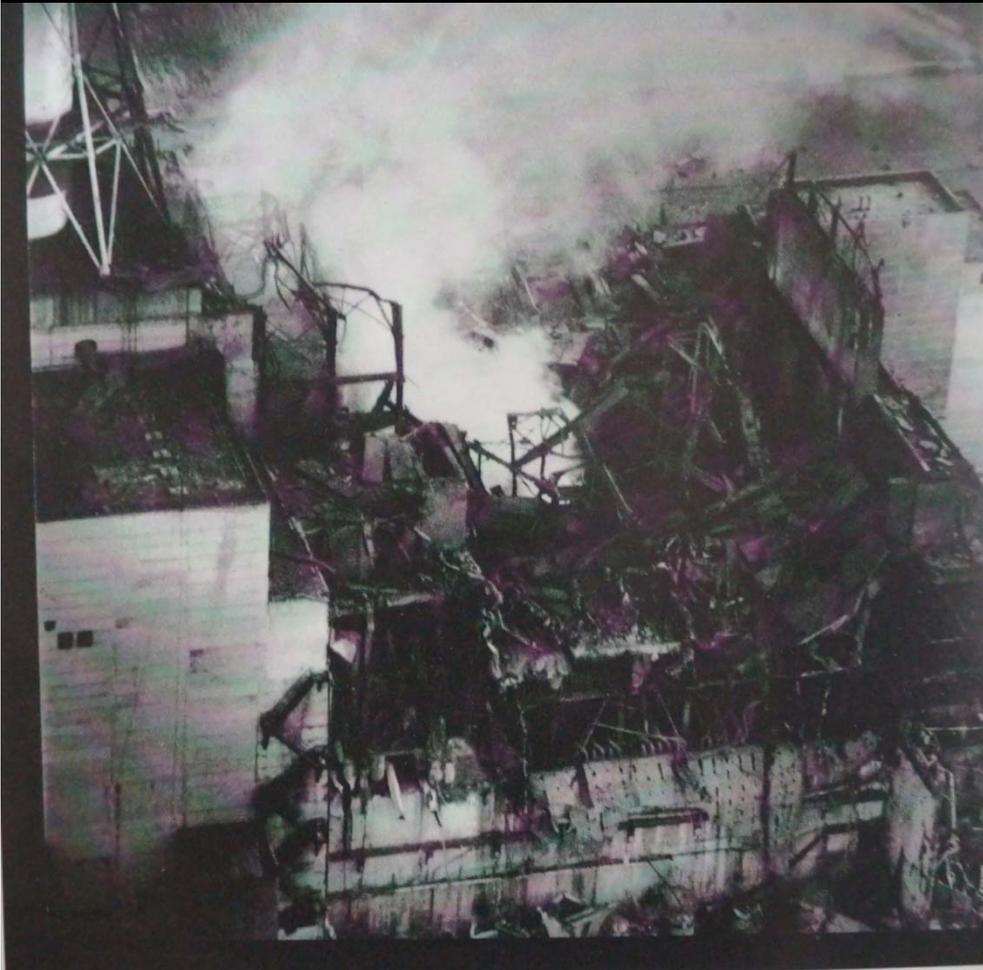
キルシンバウムは  
ユダヤ人だった

先祖は第2次大戦前はポーランドに住み、ナチによるホロコーストで祖父母や親族が殺される中、父親が逃避行の末、ウクライナにたどり着いたという。



「幼稚園のとき、初めて自分がユダヤ人と知った。両親は共産主義者で、ユダヤの信仰も文化も知らなかったが、**ずっと差別を感じて生きてきた。**」

「事故後、ロシア人の捜査官から  
『お前がユダヤ人だから  
事故が起こった』といわれた」



避難先のキエフでも  
『お前、事故起こしたく  
せに逃げやがって』と  
隣人に殴られた



妻のアーラにとってのチェルノブイリ事故の  
記憶は長女を連れての逃避行の記憶



「4月26日の深夜の3時、  
夫からの電話で事故を知った。  
夫は『**すぐに町を出るんだ**』といった」



「プリピャチを出るバスは朝6時以降止められた。  
そこでフェリー乗り場に行った。  
5時間船を待った。その間  
風は4号炉の方から吹いていた」



キエフ到着後、ガイ  
ガーカウンターを当て  
るとアンナの頭髪や衣  
服から放射能が検出  
された。

アンナは成長してからも体が細く、胃腸が弱いため  
病院に入退院を繰り返した。



あれから22年。アンナはイスラエルに来てからは健康になり、18歳からは2年の兵役も体験した。



だが、  
ドライブの途中  
アンナの心の奥に  
事故の影響への  
不安が隠れているこ  
とがわかった。

「あなたが取材でお会いになったウクライナやベ  
ラルーシの若い女性たちが産んだ赤ちゃんには  
何か異常が見つかっていませんか？」



冷戦崩壊後、旧ソ連からイスラエルに押し寄せた100万人の移民の中で14万人がチェルノブイリ事故の被災者と言われる。ある心理学者は「異国の地で健康や未来への不安はカプセルに閉じ込められており、いつか爆発する」と指摘する。

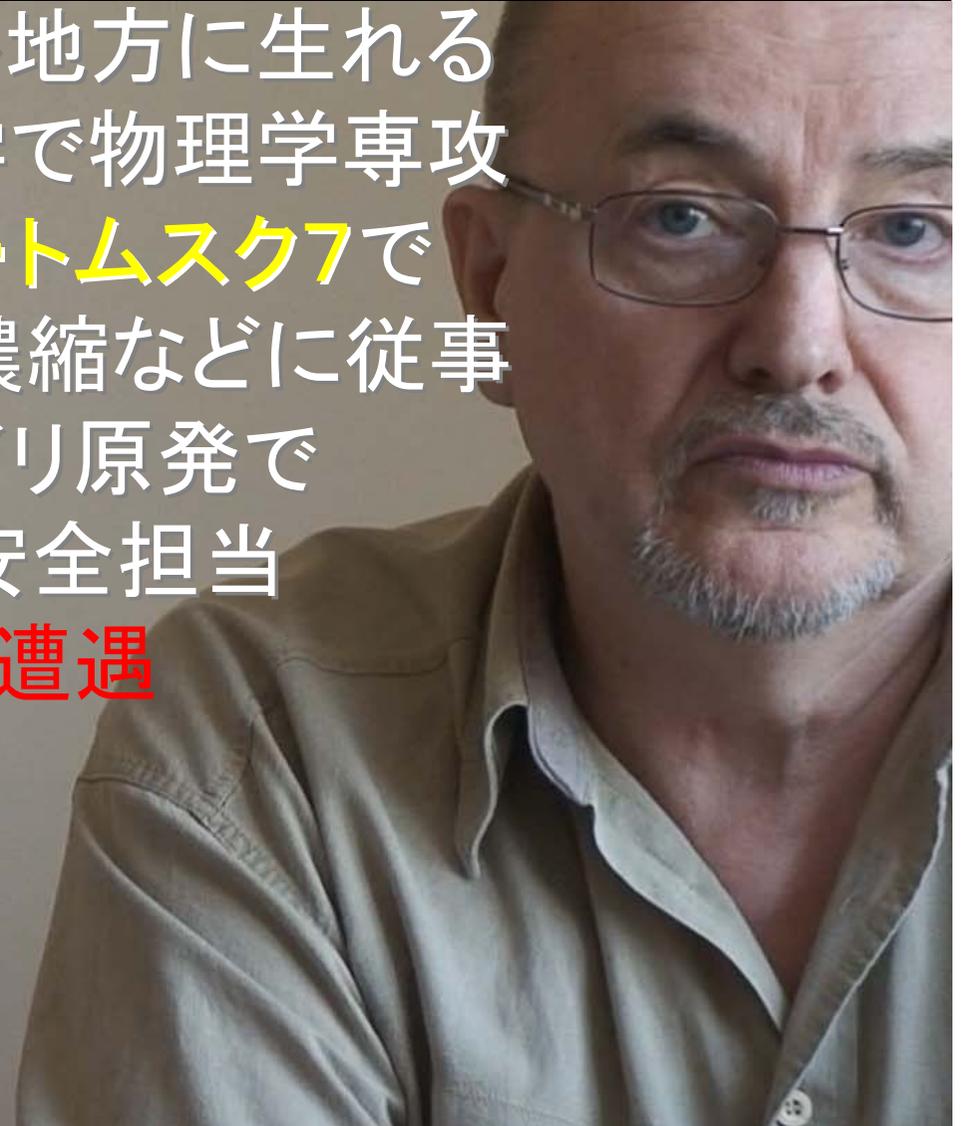
# 5. ニコライ・カルパン

(原子力安全副主任)



カルパンには2006年今中さんの紹介で会い、  
2009年に再会した

1946年 ロシアのウラル地方に生れる  
65年 トムスク工科大学で物理学専攻  
69年 **軍事閉鎖都市・トムスク7**で  
再処理、ウラン濃縮などに従事  
79年 チェルノブイリ原発で  
原子力安全担当  
**86年 事故に遭遇**



### チェルノブイリ事故現場での数日間の個人的な体験

ニコライ・カルパン (翻訳: 今中哲二\*)

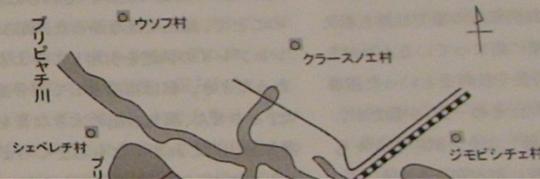
チェルノブイリ事故についてはこれまでに膨大な数の報告がなされ、また新聞やテレビを通じて様々な情報が流されてきた。しかし、事故当時のドキュメンタリー映像は、チェルノブイリ4号炉が暴走した瞬間を捉えていない。この中で、私は、責任で、事故の復讐」の時の、この日の、調査で



事故の発生を私が知ったのは朝の4時だった。チェルノブイリ市にいる親戚の女性が「原発で何か起きたの？」と尋ねる電話をしてきた。彼女は、夜勤を切り上げて戻りアパートで騒いでいる隣人2人から、何やら爆発が起きて恐ろしいことになっている、と聞いたそう。彼はチェルノブイリ原発の建設労働者で、爆発を目撃したという。私は、「爆発なんて起きっこないさ、昨日発電所に電話したら4号炉を停止する予定だと言っていたよ」と答えた。原子炉を止めるときには通常、蒸気逃がし弁の作動検査が行われ、その際に大量の蒸気が空気中に放出されて爆発のような大きな音をする。そのように彼女に答えたものの、何やら不安なので4号炉の制御室に電話してみると返事がなかった。それで、3号

炉の制御室に電話すると、4号炉で爆発があり中央ホールの屋根が吹き飛んだ、と聞かされた。あわてて表に出て眺めると、4号炉建屋の変わった姿が見えた。

すぐに自転車に乗って現場に向かったが、果たせなかった。道の途中にはすでに警官が配置されており、誰も近づけず街へ戻った。家へ戻ってから、上司のアレクサンドル・ゴポフに電話したら、驚いたことに、彼は家にいた。核安全課長の彼、それに伊物理室長のアナトーリ・クリャトにも事故の知らせが届いてなかった。ゴポフのところへ行って、発電所長のブリュハノーフに電話すると、チェルノブイリ機器調整企業体のアレクサンドロフのところへ車を回したので、それに乗って一緒に発電所に来るようにとの指示だった。



カルパンは2005年に出版した著書「原子力平和利用の復讐」の中で事故から18時間後、チェルノブイリ4号炉で「再臨界」が起こった事実を明かしている。

86年4月26日早朝のデータは  
キセノンが消失する夜半に  
再臨界による爆発が  
起こる危険性を警告していた。





カルパンは上司とともに所長に  
1. 水の供給の中止  
2. ホウ酸の即刻入手と注入  
を進言したが、  
聞き入れられなかった

A man with glasses and a light green short-sleeved button-down shirt is shown in a thinking pose, with his right index finger pointing to his chin. He is holding a pen in his left hand. In the background, a round analog clock is visible on the wall, and another man in a light blue shirt is partially visible, looking towards the camera. The scene appears to be an office or a meeting room.

そこでカルパンは家族を避難させると、  
同僚と二人で  
装甲車にのり事故炉近くに向かった

A middle-aged man with a mustache, wearing a light blue button-down shirt, is pointing his right index finger at a map displayed on a screen. The map shows an aerial view of a city with various buildings and roads. The background is a plain wall with a white door.

労働保安課主任技師の  
ユーリー・アブラモフはカルパンと  
共に26日16時から24時まで  
放射線測定を行った



二人は第4地点で装甲車から  
「爆発」を目撃した。



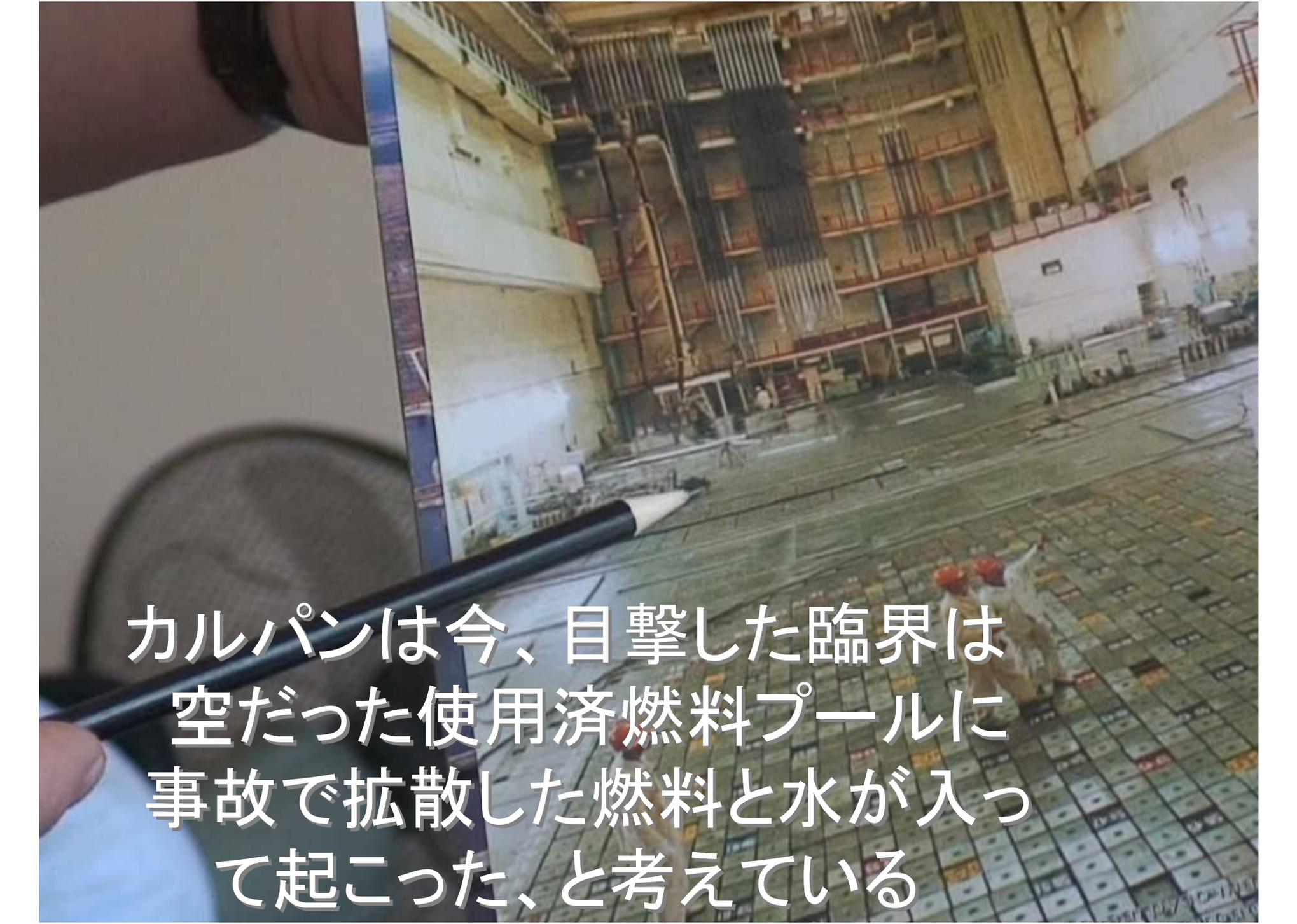
## アブラモフ

「22時頃から中性子線が上がり始め、摩擦音とぶくぶく音、白い光から朱と赤と黄が混じった**朝焼けのような色**に染まり、変化し続けた」

26.07.06

Время	T <sub>1</sub>	T <sub>2</sub>	T <sub>3</sub>	T <sub>γ</sub>
16 <sup>00</sup>	γ - β - n -	γ - β - n -		γ = 20  n = 9004
18 <sup>00</sup>	γ - β - n -			n = 1:2
20 <sup>00</sup>				γ = 30 β =

26日の24時に第4地点で  
**20n/cm<sub>2</sub>/秒**の中性子線を検出  
 メモをブリュハノフ原発所長に渡したが  
 すべて**KGBに没収**された



カルパンは今、目撃した臨界は  
空だった使用済燃料プールに  
事故で拡散した燃料と水が入っ  
て起こった、と考えている

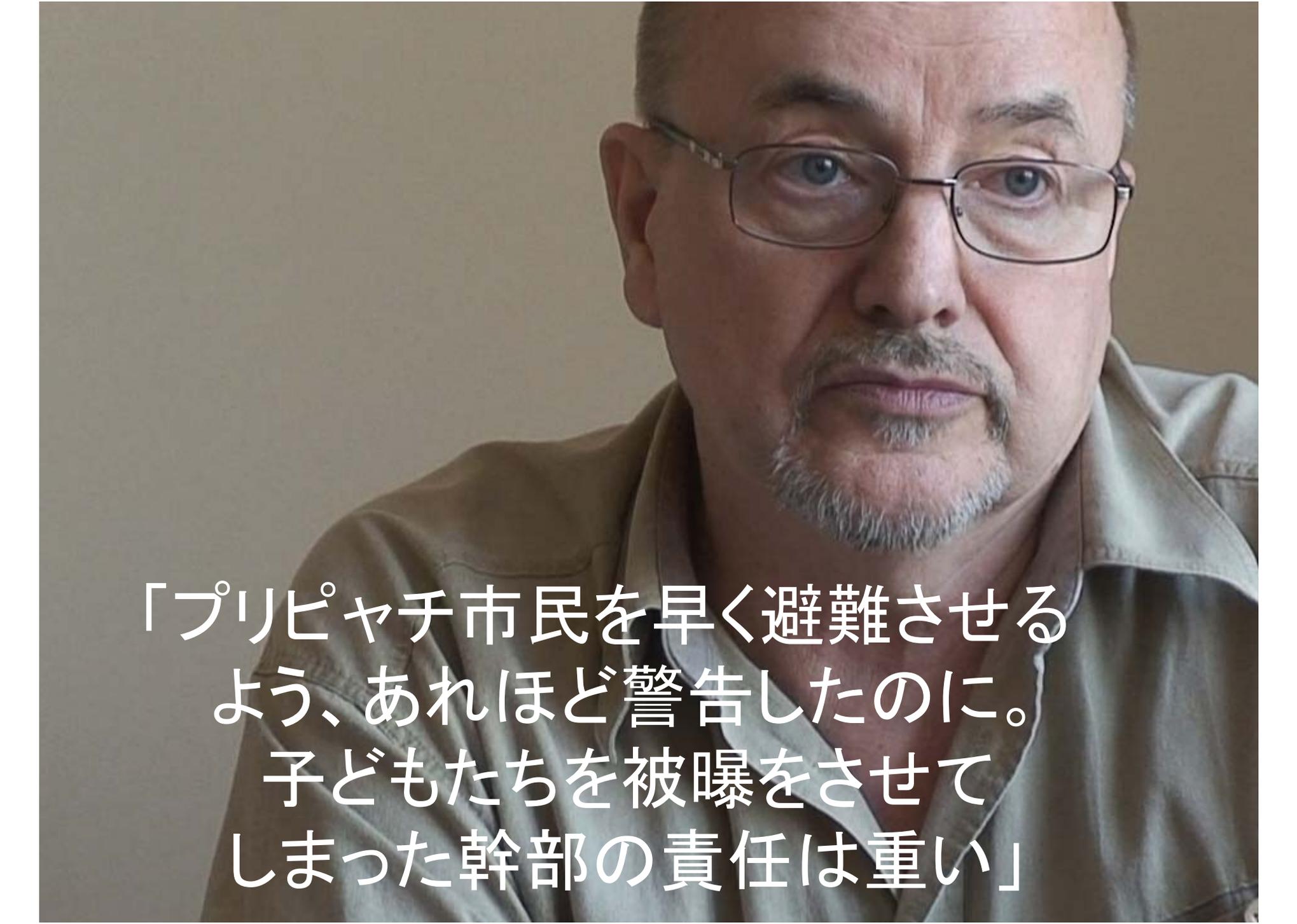
An aerial photograph of a city with a power plant in the background. A large pencil is superimposed over the image, pointing towards the power plant. The text is overlaid on the bottom half of the image.

カルパンは再臨界が  
放出放射能を増加させた  
と考えている





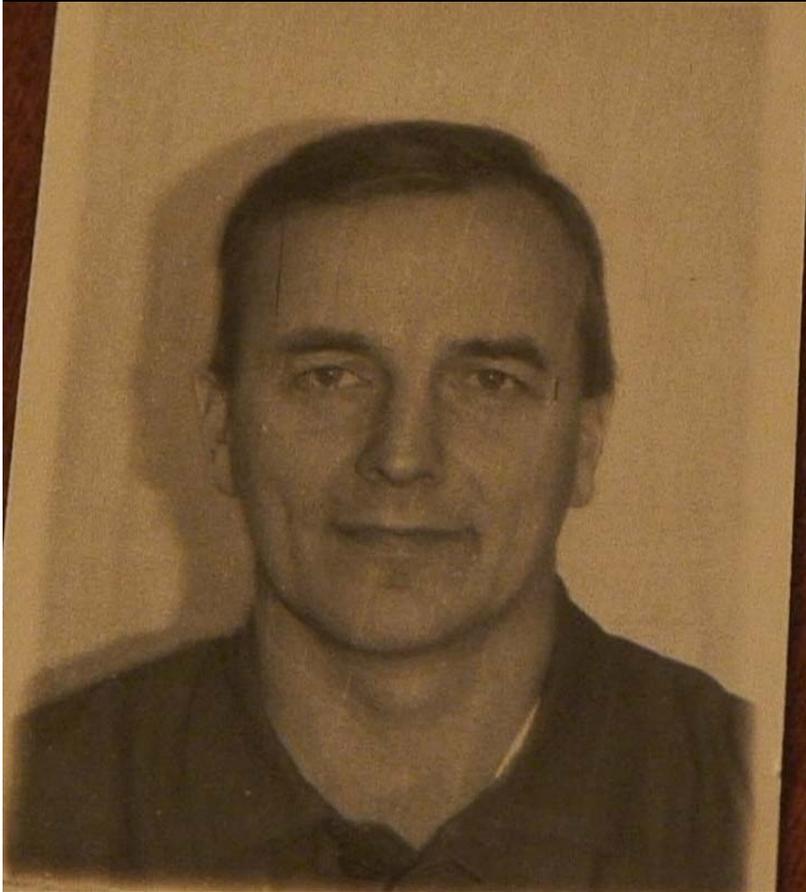
実際は予測された「再臨界」の結果であり、  
その事実が**隠ぺい**されてきた可能性がある



「プリピャチ市民を早く避難させる  
よう、あれほど警告したのに。  
子どもたちを被曝をさせて  
しまった幹部の責任は重い」



カルパンはその後事故処理に奔走し、また大量の被曝による体調悪化で長期入院。触れ合う機会が少なくなっって当時の妻と離婚した。



放射能が体に刻みこんだダメージ以上に、  
それまで信じてきた  
原子力への信頼の揺らぎが深刻となった。

事故原因を運転員に押し付けて幕引きを計る体制を許せず、91年には事故再評価委員会の報告書を書いた。そして…



「私は事故後、虚偽や隠蔽を  
嫌になるほど見た。  
人間が原子力をやっていけると  
信じるのが、できなくなった」

ほかにも様々な元原発職員にあった  
たとえば交代シフトでスマーギンと給水活動を  
ともにしたアレクセイ・ブレウスは・・・



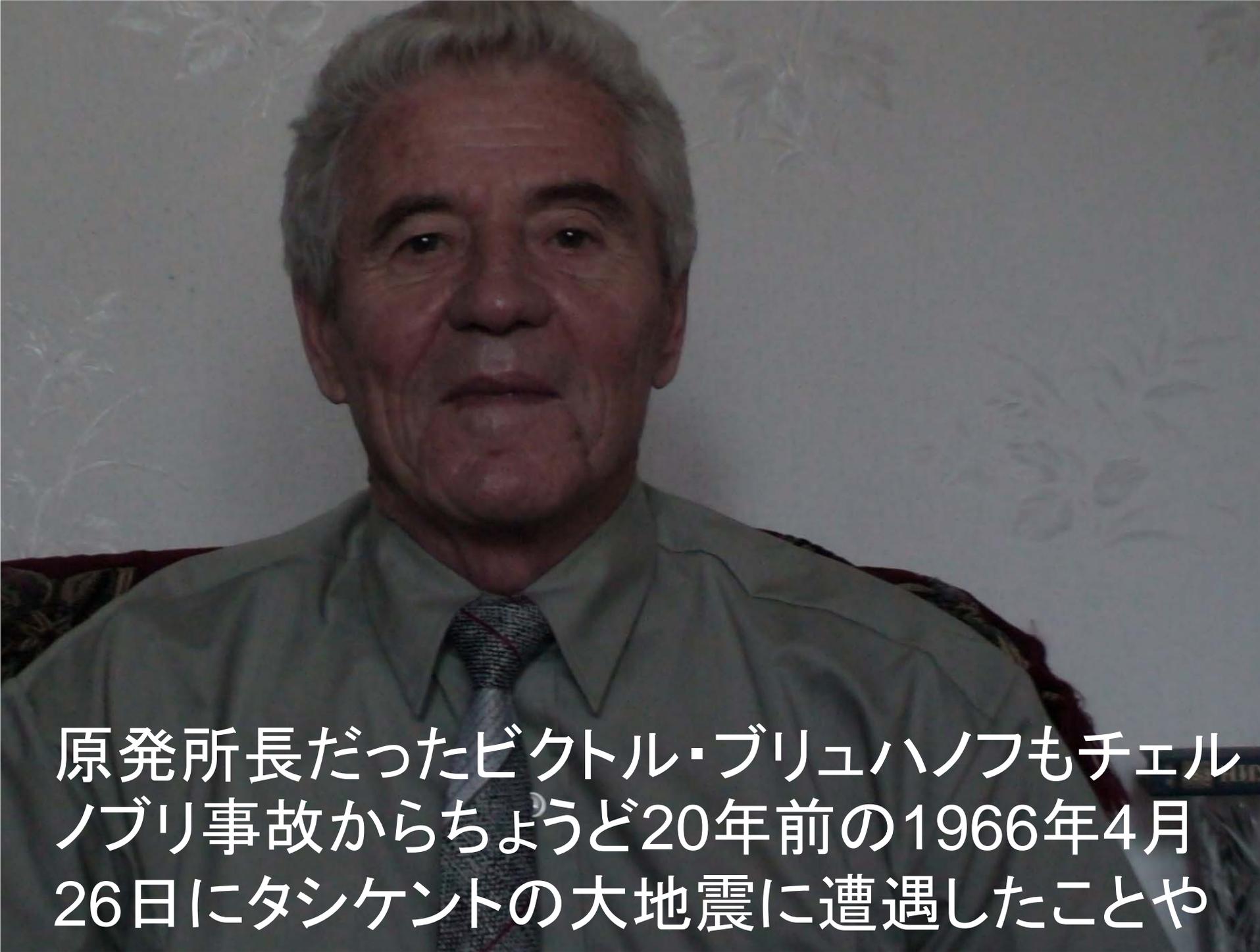
絵描きになり、  
事故が遺したものと向きあっている





彼の描く静物画には斜めに切断された  
容器が多く登場する

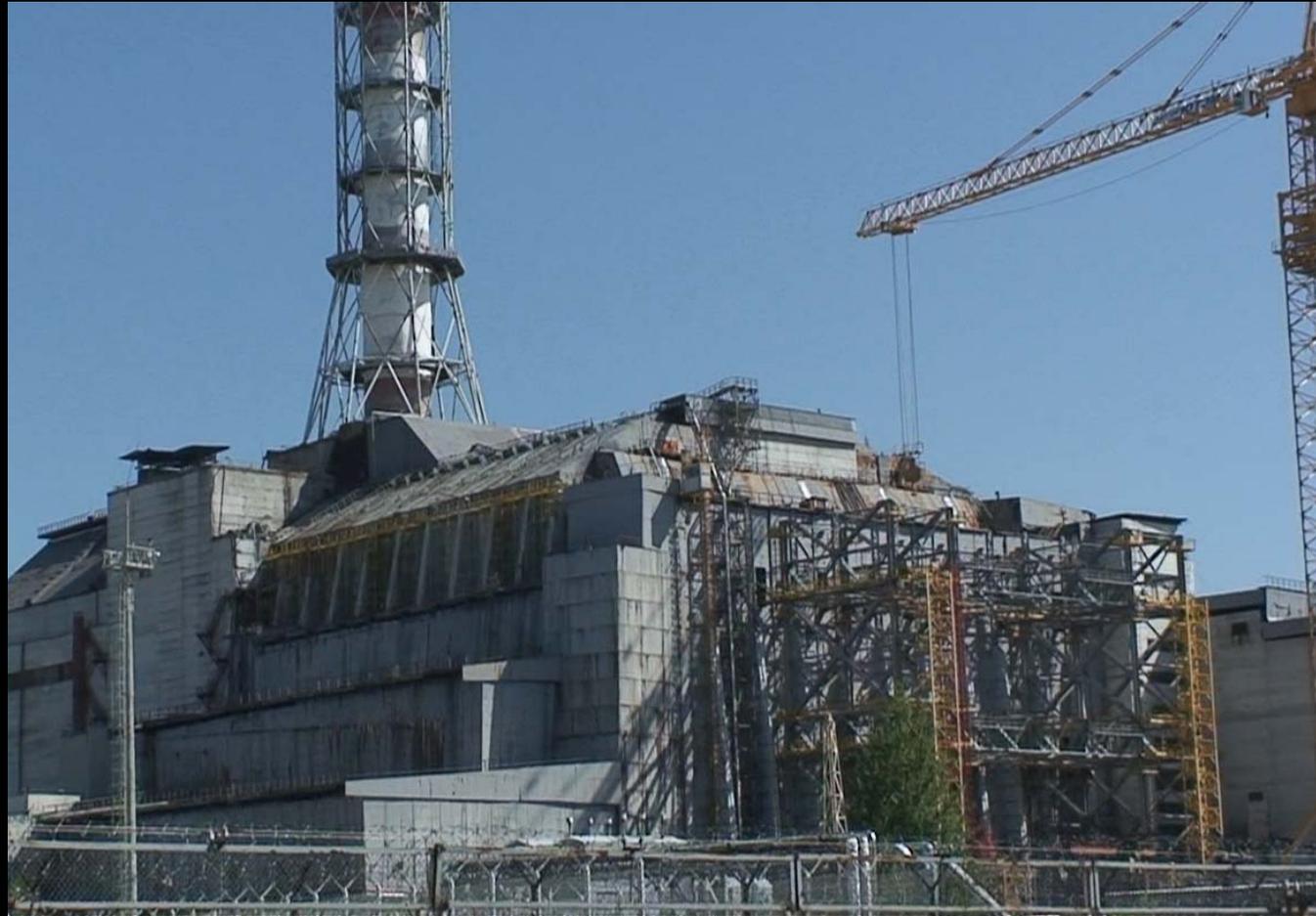


A portrait of Viktor Bryuhonov, an elderly man with white hair, wearing a light-colored shirt and a patterned tie. He is seated and looking directly at the camera. The background is a light-colored wall with a subtle floral pattern.

原発所長だったビクトル・ブリュハノフもチェル  
ノブリ事故からちょうど20年前の1966年4月  
26日にタシケントの大地震に遭遇したことや



何もない原野を開懇してプリピャチの街をつくり、原発を建設して軌道に乗った瞬間にすべてを失った喪失感を語った。



チェルノブイリ原発事故は25年たったいまも、  
癒しきれない傷跡を  
当事者たちの体と心に残している

おわり

「今中科研費」に深謝いたします